

を起し或は柔道擊劍庭球弓術に或は遠足旅行に或は書を讀み文を講ずる事に依て或は名士に益を請ふ事に依て常に親睦融會するの機會を造りつゝあり。校友會は之を以て猶足れりとせず雜誌を發行し其の事項を記録して同人の間に頒てり。是れ親睦融會の樂みを永遠にするの方便なり。今や春秋二回の發刊を改めて月刊とするの目論見を立てたるは彌其効能を大にして校友會の實績を擧げんと欲するに外ならず。而して立派に見ゆる目論見は兎角龍頭蛇尾に傾き易し。是に於て月報の永續の爲に一言せざるを得ず。

月報掲載の事項は種々雑多なり。學校記事即ち教務庶務の雜事職員の動靜は巨細洩れなく報道せんと欲す。以て日誌とも見るべく年月を経ては詳密の歴史として殘るべし。美術界彙報。是れ亦我が同人が將來翔翔せんとする舞臺の記事最も詳密を要す。海外美術界彙報。今や内外の美術相影響するの事實あり最も迅速に海外の出來事を知るにあらざれば人後に墮るの謗あるべし。新刊美術書の内容を知りて之を取捨するは修養上に缺く可からざる事なり。學問の修養を勉めずして技巧の末にのみ齷齪するは職工の事なり。我が同人皆美術家を以て任ずるもの讀書を以て日課の半を費さざる可からず。月報は此項に於て力を致さん事を期す。教室雜俎に於ては教室の瑣事逸聞を拾收せんとす。事繁瑣逸興に涉るはと其の味津々たるものあるべし。將來大美術家此中より輩出するものあらば後世の史家必ず教室雜俎中より多くの史料を拾ふ事なるべし。卒業生の動靜は在校學生の最も知らんと欲する所なるべし。凡そ世の中に事業を成さんとする者は孤立にては甲斐なき事なり。後進は先輩の推輓に依て其の志を達すべく先輩は後進の扶

掖に依て其の大を成すべし。而してかくの如き關係は互に相知るに因縁せざるべからず。是に於て卒業生諸子に望むに月報に依て故郷の現状を知り如何なる後繼者の其の中に活動せるかを知悉せられん事を以てせざるを得ず。以上は重なる事項なり。美術界の活動益旺なるに隨て掲載すべき事も益増加すべし、月報は續て面白きと有益なるとに依て其効果を益すべく又以て其の永續を保障し得べし。而して月報を讀て面白く且有益ならしむるは何人の負ふべき責任なるか。校友會同人共同の責任なり。即ち讀者はやがて記者なるか故に讀て面白く且有益ならんことを欲せば各自に面白く有益なる資料を供給すべし。是れ即ち繁榮の途なり。永續の策なり。

正木が「年月を経ては詳密の歴史として殘るべし。」と記しているように、本誌は今日掛替えない東京美術学校記録資料としての価値をもつものとなっている。編集、發行に中心的役割を果たしたのは屋代鉞三（明治二年～大正九年）で、彼は明治二十三年に本校寫字生となり、同三十一年に書記となり、本年五月に至って本誌編集主任を囑託され、以後大正五年十二月までは本校庶務掛、教務掛等を勤めながら本誌發行に力を注いだ。ほかに日置流竹林派本多利実の許可を受けて本校の弓術指南をつとめ、また、文展、帝展の書記をもつとめている。

⑦ 『美術新報』創刊と岩村透

『東京美術学校校友会月報』が創刊された年の三月には『美術新報』が創刊され、最有力美術雜誌となった。岩村透は同誌の發行に

最も尽力した一人であるが、これについて森田亀之助は次のように記している。

明治三十五年、中央新聞の美術記者をしてゐた小原大衛は、畫報社と岩村透男に相談し、先の「美術評論」〔画報社より明治三十年十一月第一号から同三十三年三月第二十五号まで発行。大村西崖が久米桂一郎・森鷗外・岩村透らの協力を得て編集したが、第二十一号以降は吉岡芳陵が編集。——編者註〕の後身として、廉價な美術新誌發兌を計畫、それが「美術新報」となつて實現した。四十三年に至り、坂井犀水が小原に代つて編輯を引き受け、岩村男を顧問として、内容外觀共に面目を一新した。それ迄も、廉價の爲か讀者は逐次増加しつゝあつたが、面目一新後は當時美術界興隆の氣運も手傳つて、定價は高くなつたにも拘らず、誌運頓に隆盛となり、一般向美術雜誌としては唯一のものとなつた。

明治四十三年、坂井犀水が編輯者となつたときから私も岩村男の命で、東京美術學校勤務の傍らではあるが、「美術新報」と密接な關係を持つことゝなつた。美術評論界と全面的に接觸するやうになつたのはそれ以來である。

岩村男は多分に政治的な又ジャーナリスチックな素質を持つ、文字通り謂ゆる評論家である。而してその特色を最もよく發揮したのは「美術新報」と、其の後に出了た「美術週報」〔大正二年十月十二日創刊〕に於てである。自から署名して書かれた論稿も澤山あるが、其他それ／＼の「時言」欄なども執筆者は他人であつても意見は大體同男のそれであつた。

坂井犀水は内村鑑三等と志を同くし、社會事業に従事して居たが、美術趣味深く、「美術新報」以前既に、「美術畫報」の編輯者であり、「畫聖ラファエル」の著者であつた。「美術新報」編輯主任としての彼れの活躍は實に目醒しく、或る場合には悲壯でさへあつた。美術評論界全般から考へても、優れた功勞者であり、私にとりては恩人である。

其他、當時の同人としては清見陸郎、稍遅れて浦仙田^{〔洗〕}邊孝次〔田辺は岩村透のすすめで同誌編輯助手になつたと自著『美術隨筆・巴里から葛飾へ』の中で書いている。——編者註〕が加はつた。清見は語學力、文學的才能、藝術的感覺に於て既に優秀であつたのだが、當時彼れの若さと狷介潔癖の性質は、岩村男の例の持病——罪はないが皮肉な毒舌に不快を感じ、長く、美術評論界に遠ざかつたのは遺憾であつた。然し結局、岩村男の最もよき評傳者を見出したことは〔清見は昭和十二年に聖文閣より『岩村透と近代美術』を出版。——編者註〕奇しき因縁ではある。

〔明治末より大正初期の美術評論家〕森田亀之助。『日本美術』第二卷第四号明治美術研究号。昭和十八年四月〕

なお附記すれば、森田亀之助はこれに次いで執筆者の変遷と同誌におけるヨーロッパの新美術運動の反映について述べている。

⑧ 美術局設置運動の復活（帝國教育會の美術局設置建言）

一般に正木直彦は天才型の岡倉寛三と對比して「有能な官僚」であつたと言われている。それは三十一年間にも互つて東京美術学校